

氏 名 李偉

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大甲第 1111 号

学位授与の日付 平成 20 年 3 月 19 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 大名庭園の空間構成に関する研究
－江戸時代の庭園における「眺望」－

論文審査委員	主 査	准教授	劉 建輝
		教授	早川 聞多
		教授	白幡 洋三郎
		教授	尼崎 博正（京都造形芸術大学）
		教授	錦 仁（新潟大学）

論文内容の要旨

江戸時代前期の大名庭園に関しては、後の時代に比べて必ずしも必要十分な史料がない場合が多く、庭園史研究を十全に行う上で史料的制約があることは否めない。ゆえに、大名庭園に関して歴史的にも空間的にも不明瞭な点が多いことから、未だに歴史的、造園史的な価値や評価が定まっていないのが現状である。

日本庭園研究における空間構成の解釈に目を向けると、従来の日本庭園の空間様式に関する研究は、庭園内部の景観と利用の面に論点が集中してきたといえる。それゆえ、園景の細部まで詳細な分析がなされたものの、庭園の景観構成に含まれる藩主の理想といった個人性の影響や、さらには庭園内外の景観を調和するために工夫されたということについてはそれほど注目されてこなかった。つまり、大名庭園の空間構成を「眺望」という視点から評価する研究はほとんどなかったといえる。

本論文では、大名庭園の空間様式をそれに伴う自然や建築空間、人間の心理的空間にまで広げて総合的な考察を試みた。従来もっぱら庭園内部の景観に向けられていた研究の視点を、外部空間へと転換させ、大名庭園の眺望景観に注目し、大名庭園における眺望景観の特徴および変遷を検討することによって、それを導いた社会的、文化的要因にまで考察を進めた。

まず江戸時代における眺望の特質を浮き彫りにするために、庭園の眺望に関する研究史をたどってみた。その結果、各時代の建築様式や、庭園空間の利用法の違いにしたがって、庭園と外部空間とのつながりの姿勢も変貌を遂げていたことが判明できた。庭園の眺望は常に変化発展する過程として認識すべきだと考える。

大名庭園における眺望を歴史的に位置付けるために本論文では、庭園の眺望を以下のような3つのカテゴリーに分けて考察を進めることとした。

- ① たんなる眺望—園外景観を觀賞の対象として認識しない、背景である。
- ② 意識的な眺望—園外景観を觀賞の対象として認識する。
- ③ 借景—園外景観と園内景観を調和させ、一体化した園景として表現する。

そして、江戸時代の大名庭園における「眺望」の特徴を代表的大名庭園の景観構成の考察によって検証を試みた。

草創期の大名庭園の「眺望」に関しては、江戸初期の代表的造園家である小堀遠州の造

園思想を考察した。その結果、今まで指摘された江戸中後期から盛んになってゆく眺望の手法は、すでに江戸初期の遠州の造園主張にその成立の基盤ができていたことがわかった。遠州好みの眺望景観は高い楼からの眺めではなく、木々の間を通して見る眺望、「見え隠れの眺望」の手法が好んで行われたと見られる。

大名庭園の空間構成は、前時代の庭園様式を受け継ぎながらも、新たな特徴を創造した。江戸で代表的な大名庭園の空間構成について、水戸藩の小石川後樂園、紀伊藩の西園、尾張藩の戸山荘を選出して考察を行った結果、いくつかの特色ある眺望への姿勢が見出される。

小石川後樂園については、初代藩主頼房との親交が厚かった儒者たちによる漢文史料に注目し、その解説によって初期の景観復元を試みたところ、眺望に関する意外に多くの記述が見られた。初期の後樂園は閉鎖的空間構成に加えて、周囲の景観の眺望も造園上に重要な役割を果たしたことが指摘できる。そして、第一の眺望地点が小廬山であったことが文献より推定された。江戸中期以後、眺望行為が強く現れるのは既往研究の解釈である。だが中期を待たずに初期後樂園に眺望景観を意識的に愛でる意図がすでにあったことを指摘した。後樂園の眺望は園内から直接遠景を觀賞するのではなく、松の葉を通して、「見え隠れの眺望」が好んで用いられたことが指摘できる。

西園の空間構成にも「眺望」の意匠が強く込められていたことが明らかになった。「眺望」行為が園内の複数の地点で行なわれ、特に「望嶽亭」からの富士山の遠望は西園を特徴付ける景観であった。額縁のような表現を用いる人工の「窓」を通しての眺望手法は「窓含西嶺千秋雪」という、いにしえの中国の詩の意境を反映する一方、窓という「額縁」を通して富士山を觀賞することは、富士山を突出させる表現である。後樂園の松の葉を通して眺める富士山より一層明白に眺望を意識した景観操作といえよう。西園からの眺望は大名の日常生活に溶け込んで、彼らの豊かな庭園の理想像の一端を反映していたと考えられる。

尾張藩の戸山荘では、建設された当初から眺望の要素が備わっていたと見られる。戸山荘の中心的建物である餘慶堂に焦点を絞り、そこからの眺望景観の特徴を考察した。その結果、餘慶堂が建てられる当初から富士遠望が庭園の構成要素として考慮されたことが明らかになった。餘慶堂からの遠望特徴は、富士山を觀賞するために、ちょうど富士山の見える部分だけ、樹の上を平らに刈り揃え、いわば緑の額縁で富士山を絡めとった形にしている手法である。しかもその人為性を隠そうとはしていない。むしろそのような作為がおもしろいと見られていたのである。

園内景観の松の形へのこだわりは、園外の対象物である富士山と同質的に、園内の松を

観賞するという、庭園内外景観の一体化が図られていたことの表れである。戸山荘での眺望は後楽園における「見え隠れの眺望」や、西園における「いにしへの意境」への追及より、庭園内外景観の一体化が一層明白になったものといえる。眺望が庭園の景観構成の欠かせない一環として認識され、借景に成り立っていたことを検証した。

大名庭園における眺望景観の形成に関しては、造園の当初からすでに意識されはじめ、徐々に手法が固められていったというプロセスを読みとることができる。江戸の大名庭園において眺望は無視できない要素であり、形式が異なることにせよ、意識的な眺望行為が江戸の前期からすでに発生していたと見るべきである。

初期の大名庭園に強く見られたのは漢詩文などを通じた中国文化へのあこがれであり、そこから生まれる「眺望」は、見たことがない観念的景観、象徴的景観、心の中の風景と言うべきものであった。しかし、大名庭園全体としては、主に象徴的景観・観念的風景の中から実際の庭園享受を通して現実の景観、園外に広がる風景への眺望がより一層意識化されるようになってきた。

従来、その空間構成に眺望を見出そうという考えが極めて乏しかった大名庭園の各所に「眺望」が見出された。しかもそれは江戸の時代が進むにつれて、遠方の眺望までも園内に取り込もうとする高度な操作性も含む手法にまで成長していたのである。このような操作された園景の見せ方こそ大名庭園の眺望の特徴であり、園外景観の発見につながる重要な手段である。江戸時代の眺望は徐々に絵画的構成や象徴的景観から外部の自然にも目を向けるようになった。内向きに洗練されてきたといえる日本庭園の伝統的様式に新たな外向きの特色が加えられたといえよう。

論文の審査結果の要旨

本論文は日本庭園史上、時期的にもまた内容的にも大きな位置を占めながら、近年まで十分な評価が行われることが少なかった江戸時代の大名庭園の価値を景観論の観点から論じたものである。

大名庭園を取り上げる視角は、さまざまに考えられるが、本研究は従来行われてきた庭園内部の意匠的特徴に注目する様式史的な研究をこえて、庭園外部の空間や立地特性などをも包摂した空間構成を総合的に考察しようとした点に特徴がある。このことにより、従来の見方に変更を迫る発見があった。まず草創期の大名庭園における眺望について、江戸初期の代表的作庭家である小堀遠州の事績を詳しく検討し、とくに江戸城での作庭事業とその造園思想を考察することにより、このころすでに園外の眺望を庭園の空間構成上重要な要素として採用する先駆的な発想があったことを明らかにした。こうした初期大名庭園を貫く景観的特質の基礎的な分析をもとにして、本論文は3つの大名庭園（水戸藩の小石川後樂園、紀伊和歌山藩の西園、尾張藩の戸山荘）を具体例として取り上げ、その景観上の特徴に焦点をあてて考察している。これらの庭園が主として分析の対象とされたのは、17世紀後半から江戸時代を通じて存続し、また庭園の拝見記や絵図・図面等も比較的残されている庭園だからである。

初期後樂園は閉鎖的空間構成が中心ではあるものの、それに加えて周囲の眺望をも取り込む造形と工夫が施されていたこと。和歌山藩の西園では園内の複数の地点からの眺望が設計され、園亭の一つ「望嶽亭」は富士山を観賞する人工の窓として重要な庭園風景を構成していたこと。また尾張藩の戸山荘では園内の代表的な建物である「餘慶堂」の建設がこれまた富士山の遠望を主要な景観要素として計画されたこと、などが指摘された。

初期の大名庭園では、漢詩文などを通じた中国文化へのあこがれが園内の造形に強く影響を与えたとみられるが、そこから生まれる「眺望」は、実見したことがない観念的景観、象徴的景観というべきものであった。ところがそうした空想的な心理的「眺望」の中から、実際の庭園享受を通して現実の景観、園外の風景への眺望がより一層意識化されるようになってゆく。その結果が園外景観への強い関心であり、園内への積極的な外部景観取り込みにつながったと考えられるが、その過程を図面、日記等の記述に加え庭園景観を詠んだ和歌や絵画等を参照しながら考察している。

こうして本研究は、従来の庭園美学の観点からは高く評価されることがなかった江戸の大名庭園を近世の新たな視覚的実験場として見出した。さらに、その空間構成に眺望を見出そうという考えが乏しかった大名庭園に意識的な眺望の例を摘出して、庭園史研究に新しい視点を提案したことが特筆できる。従来、いうならば内向きに洗練されてきた日本庭園の伝統的美学に対して、江戸時代の大名庭園に現れた外向きの美学を指摘して庭園という素材から新たな日本文化の空間論の可能性を提示しようとした興味深い試みと言える。

以上、本論文の評価すべき内容をまとめれば、次のような諸点が挙げられる。

- 1、日本庭園および大名庭園の研究史をよく整理検討して、これまで指摘されることがなかった大名庭園の重要な特色、ことに園外への眺望という視覚上の特質を見出してこれを解明したこと。
- 2、従来の研究では看過されていた園外眺望は、とりわけ富士山を重要な要素としていくことが多く、富士山を眺望する仕掛けが施された庭園であることが大名庭園の一つの特色であることを明らかにしたこと。
- 3、大名庭園の研究を視覚的観賞や造形上の意匠の観点でおさめることなく、「眺望」という観点で見直すことにより江戸期の漢詩、和歌、絵画等の日本文化と深くかかわる分野であることを示して、今後の文化論の可能性に示唆を与えたこと。

このように本論文は評価すべき点が多々あるものの、問題点、課題もいくつか残されている。先行論文への評価（ならびに批判）が十分な読解に基づいていないと思わせる部分があること、「眺望」を眺望対象への認識の違いにより3つの段階で区分する、としながら今一步の踏み込みが足りないこと、先行する時代の庭園を大名庭園はどれほど継承しているかの考察が十分ではないこと、などを指摘しうるが、論文全体としてそうした欠点を補う内容とまとまりがあり、十分な学術的価値が認められ、学位を授与するに値すると評価する。